

第一章 文学研究科・文学部の活動状況

文学研究科・文学部の歴史については、平成9年9月に刊行された『京都大学百年史部局史編』の第二章「文学部」に平成7年度までの記述があり、また平成18年6月に刊行された『京都大学文学部の百年』には平成17年度末までの記述がなされており、その100年の間に及ぶ主要なできごとは両書によってほぼ網羅されている。とくに平成8年の大学院重点化以降の事項については後者に詳細な記述があるので、参照いただきたい。また、本報告書の目的はあくまで文学研究科・文学部の研究・教育に対する自己点検・評価であって、その活動の広報的紹介ではない。

ただ、自己点検・評価報告書としては、平成15年度版には活動状況のまとまった記述はなく、またその活動は、言うまでもなく、文学研究科・文学部の研究・教育の充実と活性化、並びに社会的責任を果すために行われているものであって、自己点検・評価の重要な指標となるものである。よって本章では、近年（主として平成14年以降）の活動のうち、自己点検・評価に関わる重要事項について記述しておくこととする。

文学研究科主催シンポジウム

大学院重点化のなった平成8(1996)年から、文学研究科では研究科内の研究状況を相互に理解し、また一般市民にも広く文学研究科の研究活動の一端を知ってもらいたいとの趣旨で、研究科主催のシンポジウムを企画した。以後、毎年1回の開催をつづけている。

2002(平成14)年以降の開催日時とテーマは次のとおりである。

- 第7回 2002年11月30日 歴史学の現在を問う
2002年12月2日 「自然という文化」の射程
- 第8回 2003年12月6日 文学と言語にみる異文化意識
- 第9回 2004年12月4日 空間の行動文化学
- 第10回 2005年12月17日 京都と北京：光の交わる場所—学問知から人類知へ
- 第11回 2006年12月2日 グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて

なお、第6回以降は文学部同窓会「京大以文会」の後援を得ており、また第7回以降は「京都大学文学研究科国際シンポジウム」と称している。第8回、第9回および第11回は、後述の21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の研究成果の一部の公表を兼ねて開催され、同プログラムとの共催である。第10回も同じく同プログラムとの共催であるが、さらに2005年4月の北京大学歴史学部との学術交流協定締結の記念も兼ねて開催されたものである。

学術交流協定の締結

文学部は昭和59(1984)年12月に、教育学部・法学部・経済学部・人文科学研究所とともにハーヴァード大学イエンチン研究所（アメリカ合衆国）と学術交流協定を締結した。その後、学部独自のものとしてローザンヌ大学文学部（スイス、1994年5月、1997年6月の京都大学とローザンヌ大学との大学間学術交流協定の締結により解消）、ジュネーヴ大学

文学部(スイス、1998年3月)、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院(連合王国、1999年7月)、パリ第8大学「歴史・文学・社会学」学部(フランス、2003年11月)と学術交流協定を結んできた。平成16(2004)年以降の学術交流協定の締結(協定の締結日、協定研究機関、協定内容)は次のとおりである。

平成17年4月13日 北京大学歴史学部(中国)

学術研究者の交流、学術情報・書籍・論文の交換、学術上及び教育上有益と思われる共同事業の実施

平成17年7月1日 ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支所(ロシア)

学術研究者及び学生の交流、学術情報・書籍・論文の交換、学術上及び教育上有益と思われる共同事業の実施

以上の結果、現在文学研究科・文学部では6か国6大学との間で学術交流を推進している。なお、国内の大学との交流については、平成11年11月に奈良女子大学大学院人間文化研究科との間で学生交流協定が締結されており、12年度から施行されている。修士課程学生を対象とし、相互に授業を提供、単位を認定するもので(5科目10単位まで)、授業料は不徴収である。毎年、若干名の相互履修がある。

奈良女子大学との交流協定による学生交流受入数

	京都大学	奈良女子大学
平成14年度	11	2
平成15年度	15	0
平成16年度	14	0
平成17年度	14	4

21世紀COEプログラム

(1) 「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」(拠点リーダー: 紀平英作)

21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」は、平成14年、文部科学省が推進する同プログラムの人文科学分野において採択され、同年10月から平成19年3月まで、5年計画として実施された大学院博士課程研究教育基盤充実のための大規模プログラムである。文学研究科教員のうち20名が事業担当者となり、他の多くの教員も協力者として参加した。プログラムの全体代表を教授紀平英作が務めた。

このプログラムの活動については京都大学文学研究科のホームページにおいて逐次紹介がなされ、また文部科学省・日本学術振興会も本プログラムに対する中間評価を公表していることから、プログラムの細目をここに改めて詳記することは省く。かわって、プログラムの過程でなされた一連の事業や成果を自己点検という視点で概観し、その間にみられた課題を指摘し、あわせて今後の展望にも触れたい。

I. 実施の態勢

本プログラムは、中央にCOE実施委員会をおき全体プロジェクトの企画・運営を行う一方で、具体的な研究テーマの追求のため、研究班という組織を設置した。将来に向け幅広い展開が期待される新鮮なテーマを設定し、数名の研究者が班組織の指導的立場を引き受け、大学院生、さらには他大学の研究者もくわわらかたちでの、本格的な研究プロジェクトを進める共同研究組織であった。本プロジェクトの場合、この班が母体となって開催した国際的シンポジウムも多い。班活動は、その意味できわめて広範なものであった。

具体的には平成14年以降16年3月まで、13の研究班が活動した。その後、16年4月、一班を再編成するとともに、あらたに2班をくわえた。したがって16年度から18年度までは、15の班がそれぞれのテーマを中心に研究教育活動を行った。各班の名称は以下の通りである（16年4月の再組織は③～③がそれにあたる。また16年に設置した新規の2班とは⑤、⑤である。）

(1) 歴史学分野「グローバル化時代の多元的歴史学」

- ①「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」研究班（以下研究班を略す）
- ②「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」
- ③「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」（平成14～15年度）
- ③「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」（平成16～18年度）
- ④「王権とモニュメント」
- ⑤「帝国システムの政治・文化的比較研究」（平成16～18年度）

(2) 哲学分野「多元的世界と哲学知」

- ⑥「現代科学・技術・芸術と多元性の問題」
- ⑦「規範性と多元性の歴史的諸相」
- ⑧「多元的世界における寛容性についての研究」
- ⑨「新たな対話的探求の論理の構築」

(3) 文学・言語学分野「文学と言語に見る異文化意識」

- ⑩「文学と言語を通して見たグローバル化の歴史」
- ⑪「極東地域における文化交流」
- ⑫「『翻訳』の諸相」
- ⑬「古代世界における学派・宗派の成立と＜異＞意識の形成」
- ⑭「ユーラシア古語文献の文献学的研究」
- ⑮「言語と論理における普遍性と個別性」（平成16～18年度）

他方、COE実施委員会は、プログラムの全体的調整と、さらに包括的テーマ設定、あるいはより深い問題の掘り起こしを図るべく、平成14年度以降、18年度まで毎年国際シンポジウムを開催した。その日時・テーマは上記の「文学研究科主催シンポジウム」の項を参照いただきたい。それ以外に、COEプログラム単独のシンポジウムとして、平成18年9月25日、ケンブリッジ大学において、“KYOTO-CAMBRIDGE International Symposium “Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy” を開催した。

II. プログラム実施の経緯と新しい知見

総合課題として本プログラムは、広域的統合を繰り返した人類がその一方で歴史的に育んだ文化的、思想的な多元性の重要性を再確認するとともに、その多元性の歴史の実態、ならびに多元性を包摂する制度や文化的態様を明確にすることを目標とした。歴史学、哲学、文学・言語学、各専門分野のものがこの種の大きな共同テーマに取り組むことは、問題意識のずれなどすべてが順調ではなかったが、4年半の経験をへてある方向もみえてきたように思える。

特定専門をこえて広く人文学的にみる複眼的な関心がそれであった。各自の研究方法や視野の拡大、さらにはそれぞれのテーマを国際的に論じる機会の増加による研究者各々の国際化の進行も、本プログラムの成果であったが、同時に研究班活動全体からえた共通の知見も有益であった。以下、その共通の知見にふれたい。

世界史において人類文化が保持した重要な認識の一つが、多元性、つまり人びとの文化はそもそも一律でなかったし、一律ではあり得ないという認識であることは確言してよい。その認識は、近現代の理念としていえば人間が生きる上での不可欠な自由、あるいは自由の意味と呼びうる。ただし、先立つ4年間、われわれが検討課題としたのは、様々な地域社会・文化が接触・融合を繰り返した人類の歴史において、その種の多元性を人びとは統合と同時にいかに認識したか、また統合のもとで多元性を承認する制度をどのように考案したかであった。この基本課題を立てた背景には、統合にむかう歴史過程では多元性の消去がすくなくならず起こったと想定したからであったが、同時にその消去の過程で、多元性の暴走とでもよんでよい、実のところ強者の弱者に対する征服、支配、あるいは異なるものの抹殺などがみられたからである。歴史的に見るとき、多元性とはそれが無規範にぶつかり合うとき、時として驚くほどの不寛容を生み出す基盤となった。そのことは、グローバル化時代と呼ばれる今日においてさえ自由という名もとの不寛容は、すさまじい敵対の連鎖を生み出すという危機的事実に端的に表れている。

敵対を克服する寛容の意味を含めて、われわれの模索と当面の知見をあえて暫定的に言えば、社会・文化のあり方を問題とする場合、多元性そのものの重要性を語るに先立ち、多元性をいかに客観的に認識するかが人文科学の基本課題であろうという理解である。たとえば多元性を生み出した、また組み込んできた歴史的枠組みへの突っ込んだ理解が、多元性が持った歴史的状況を受け止めるうえで基礎的な作業であろう。さらに、特定状況での多元性の複雑さを解明しつつ、多元性を承認する制度や対話、寛容の歴史的あり方を明らかにすることも大きな課題であろう。この5年の研究を通してわれわれのプログラムは、過去と同様今日でも、人類社会における多元性の理解に関して、なお曖昧な、実際には揺れ動く論理や実態が存在する事実を解明した。その知見を基礎に、歴史事実としての多元性をより客観的に認識し、他方では思想的に多元性を受容する普遍的な規範性を探求していくことが引き続き課題であろう。

III. プログラムの具体的な成果について その1

5年の研究活動を通して本プログラムは、以上の新しい知見を含めてかなりの研究成果を公刊してきた。とくに平成14年度末に出した第1回報告書（1巻）以来、平成18年度末まで各年度ごとに報告書を公刊している。平成15年度の第2回報告書は5巻および2つの別冊であり、平成16年度の第3回報告書は上下巻2冊、平成17年度の第4回報告書も上下巻2冊である。平成18年度には第5回報告書として2冊にわたる研究論文集と、COEの

活動基礎データを集計した別冊報告書を刊行した。

さらに平成14年から17年度にかけて、シンポジウムに関する報告書、および個別の研究成果をも公刊した。以下がその一覧である（※印は京都大学大学院文学研究科の発行）

2003年

- 1) 『「自然という文化」の射程』（2002年12月シンポジウム報告書）※、2003年3月刊
- 2) Takashi Minamikawa, ed., *Material Culture, Mentality and Historical Identity in the Ancient World: Understanding the Celts, Greeks, Romans and the Modern Europeans*. Proceeding of the First International Conference for the Study of European Identity from a Historical Perspective in September 2003, Graduate School of Letters, Kyoto University, ※、2003.
- 3) 第11研究会「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」編『国際シンポジウム15～16世紀の東アジア地図』韓国誠信女子大学校韓国地理研究所、2003年3月刊
- 4) 第14研究会「王権とモニュメント」編『京都大学所蔵古瓦図録I』山野道三コレクション、※、2003年3月刊
- 5) ユーラシア古語文献研究叢書1、庄垣内正弘著『ウイグル語文献の研究—ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト—』※、2003年3月刊
- 6) 谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年10月刊
- 7) 紀平英作編『帝国と市民 苦悩するアメリカ民主政』山川出版社、2003年4月刊

2004年

- 1) 『文学と言語に見る異文化意識』（2003年12月6日開催のシンポジウム報告書）※、2004年3月刊
- 2) 第22研究班「規範性と多元性の歴史的諸相」『ACADEMICA—学の制度と規範—』（2003年10月4日開催のシンポジウム報告）※、2004年3月刊
- 3) 第14研究会「王権とモニュメント」編『安祥寺の研究 I—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院』※、2004年3月刊
- 4) 藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』※、2004年3月刊
- 5) Toshiharu Nakamura, ed., *Rembrandt as Norm and Anti-Norm*. Papers given at a colloquium held at the Graduate School of Letters, Kyoto University, Dec. 15, 2002, Graduate School of Letters, ※、2004.
- 6) 紀平英作編『ヨーロッパ統合の理念と軌跡』京都大学学術出版会、2004年3月刊
- 7) 『近世中・東欧における地域とアイデンティティ』（2004年3月6日開催の国際シンポジウム報告書）※、2004年3月刊
- 8) ユーラシア古語文献研究叢書2、Kazuhiko Yoshida, *Studies in Anatolian and Indo-European Historical Linguistics*, ※、2004年3月刊

2005年

- 1) 南川高志・小山哲編『近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容—政治文化・古典研究・大学—』（2005年3月6日開催の国際シンポジウム報告書）※、2005年3月
- 2) ユーラシア古語文献研究叢書3、佐藤昭裕『中世スラブ語研究——『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語』※、2005年3月刊

2006年

- 1) 紀平英作・吉本道雅編『京都と北京——日中をむすぶ知の架橋』角川書店、2006年12月

2) 欧文論文報告書 *Humaniora Kiotoensis*, ※、2006年12月

なお、本プログラムの最終年度、平成18年度末（2007年2月から3月）には、5年の研究を盛り込んだプログラムの総括的成果を積極的に公刊している。以下がその一覧である。

1) 紀平英作編『グローバル化時代の人文学（文学部創立百周年記念論集）』上・下巻、京都大学学術出版会、2007年3月刊

2) 藤井讓治編『大地の肖像』京都大学学術出版会、2007年3月刊

3) 夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会、2007年3月刊

4) 南川高志編『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房、2007年3月刊

5) 「王権とモニュメント」研究班編『皇太后の山寺』柳原書店、2007年3月刊

6) 芦名定道編『多元的世界における寛容と公共性——東アジアの宗教的状况の中で』晃洋書房、2007年3月刊

7) 片柳榮一編『新たな対話的探求の論理を求めて』晃洋書房、2007年3月刊

8) Katsumi Mimaki, *The Clarification of the Bon Gates (Bon sgo gsal byed) : Critical Edition*. ※、2007年3月刊

9) 「極東地域における文化交流」研究班編『文明十四年三月二十六日漢和聯句百韻訳注』2007年3月刊

10) 若島正編『「翻訳」の諸相—『エヴゲーニー・オネーギン』のウラジーミル・ナボコフ』※、2007年3月刊

本プログラムの総合的な成果を世に問うものであり、相応の評価を得るものと期待している。

IV. プログラムの成果について、その2——とくに若手研究者の育成について

京都大学文学研究科の研究教育活動の活性化を目指すなかで本プログラムがとくに企図したいまひとつの重要な目標は、大学院博士課程学生、ならびに博士学位取得者（以下PDと略記）を中心とする若手研究者の育成である。彼らの研究水準を引き上げとともに、国際的活躍の場を提供する目標を設定した。この点については班の活動に若手研究者をくわえることで、彼らの研究水準の全体的引き上げを図ったほかに、とくに力を注いだ2点を記したい。一つは、若い研究者がおのおののテーマで進める海外調査あるいは海外での研究報告を奨励したことである。大学院生、PD、ODの海外出張を財政的に支援する活動がその共通した内容であり、実際平成18年度には22名の若い研究者を平均8日間の海外出張に派遣した。プログラム開始前の状況に比べて大学院生およびPDの海外調査および学会発表は飛躍的に拡大しており、その活動は彼らの研究内容にも成果として端的に反映していると信じている。

いま一つは若い研究者をCOE研究員、あるいは研究補佐員に雇用することで、本プログラムの実施、さらには研究班活動において活発な役割を与えることであった。5年間にわたって任期2年で採用し、全体人数で43名のPDをCOE研究員、また21名の大学院博士課程学生を研究補佐員として雇用した。COE研究員の採用にあたっては平成17年初めから完全な公募制を採用し、京都大学大学院出身者以外も採用した。

こうしたCOE研究員もしくは研究補佐員に採用した若手研究者は年間一篇の研究論文を報告書に投稿しており、実際平成14年度から今年の3月まで彼らの論文を中心に本プロ

グラムの報告書は作成された。研究報告の量的拡大にくわえて、その内容の充実も確実に進みつつあると信じている。

V. 今後の展望

本プログラムは、京都大学文学研究科が人文学における国際的な研究教育拠点として機能することを目標に、新鮮な研究テーマの開拓さらには国際的な研究者を育成する基盤を従来にもまして拡大・充実していくことを目指してきた。その点での成果は、上記したとおりであったが、同時に多くの課題を残してもいる。とくに国際的活動からさらに交流は、継続することが肝心であり、そのためには人的基盤、財政的基盤を継続的に維持することが求められるからである。国際分野でのプログラムの活動を簡単に振りかえるとともに、今後の課題を展望しておきたい。

5年の間にわれわれは次の研究機関と積極的な交流関係を構築してきた。北京大学歴史学部。同学部とは文学研究科は平成17年3月交流協定を締結し、同年12月には第1回の合同シンポジウムを開催した。さらにケンブリッジ大学哲学部、古典学部、歴史学部との交流。2006年9月、ケンブリッジ大学で開催したKyoto-Cambridge International Symposiumは終日の濃密な討議、また多数の参加者など、その斬新さにおいて特筆すべきシンポジウムであった。新しい人的交流、さらには学問的共同研究の基盤が出来たことは疑いないが、同時にそれらを今後いかに拡大していくか。平成19年秋には北京大学において第2回の合同シンポジウムを開催した。京都大学文学研究科から13名の研究者が参加し、報告と活発な議論を行った。ケンブリッジ大学との間では、シンポジウムを基盤とした共同研究論集の刊行が検討されている。じっくりと取り組みたい。

そのほか、この5年間に国際的交流を拡大した大学は、北京大学およびケンブリッジ大学の他にも数多くあった。パリ第8大学、韓国ソウル大学、ハイデルベルク大学、プリンストン大学などである。こうした諸大学との国際的な共同研究態勢を引き続き拡大させること、さらにはPDクラスの若手研究者を継続的に国際研究集会に参加させるための財政的支援を確保することも重要であろう。本プログラム終了を機に、成果を引き継ぐ新規プログラムの検討の動きがある。文学研究科の活動の基盤の一つが法人化を境にプログラム単位の資金に支えられてはじめてきたことは、「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の実施が端的に示す事実であり、その意味でも今後、文学研究科のあらたな展開をささえる斬新な計画の立案を期待したい。

(2) 文部科学省21世紀COEプログラム「心の働きの総合的研究教育拠点」

(Center of Excellence for Psychological Studies) (拠点リーダー 藤田和生)

(京都大学心理学連合)

本拠点は、平成14年度の事業として採択され、同年10月より、活動を開始した。文学、教育学、人間・環境学、情報学各研究科の関連講座の連合構想による拠点形成プログラムである。具体的な活動においては、高等教育教授システム開発センター、霊長類研究所(いずれも一部)も協力部局として参加した。

高度情報化社会、少子高齢化、地球環境破壊等、未曾有の大変化が急速に進行する中で、人の心の本質を知り、人の心を導くことのできる新しい知の体系が求められている。この時代の要請に応えるため、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学としての心

心理学を統合し、新世紀にふさわしい融合科学としての心理学を構築することを目指した。

京都大学は「創造的で多様な個別活動とその調和」を特色とする。これを活かすため、本事業では、3つのレベルで研究活動を推進した。第1は、研究者の自由な研究活動の支援であり、創造性豊かな一次研究成果の蓄積がその目的である。本拠点の基礎体力を培うものと位置づけられ、それなくしては高度な総合的活動につなげることはできない。第2は、「イメージと表象の性質と機能」「身体化される心」「文化・社会的環境との相互作用」「進化と生涯発達」という学際的・国際的研究チームとしての活動である。ここでは各チームが自由にワークショップやシンポジウムを企画し、関連研究者間の情報交換と討論を通じて、知識を集約し、新たな融合的課題や共同研究の可能性を探ってきた。第3は、拠点全体としての諸活動であり、大規模な国際シンポジウムや研究成果の出版、及び新たな教育システムの整備である。平成15年度には、米国の心理学研究の一大拠点であるミシガン大学において京都大学シンポジウムを開催し、大学間国際交流協定覚書を締結した。また平成18年度には英国ランカスター大学心理学部との国際交流協定覚書を締結した。

拠点全体としての高度な研究活動を継続する一方、基礎系・実践系の融合的研究として、心理カウンセリングにおける共感的対話、遺伝カウンセリングと意思決定、ADHDなどに関する共同研究を進めた。また、拠点の中心課題として、「感情科学」の構築を目指した。感情は多くの認知活動と相互作用を持ち、人の行動を規定する大きな要因である。感情が認知・行動に及ぼす影響とその適応的機能について比較認知科学、神経科学、心理実験、臨床実践など多様な観点から分析した。

教育活動においては、基礎から臨床に至る広い視野を持った人材の育成を目指して、部局間のカリキュラムの共通化・相互化を進めた。ほとんどの心理学関連の講義を、他学部・他研究科から自由に履修可能とし、修士・博士の学位論文審査も、部局規定の制約が許す範囲で、可能な限りの相互化を進めた。平成16年度からは学部初級実験を共通化した。平成18年度には、心理学入門のための共通科目を設定した。大学院生への競争的研究経費の支給や国際交流制度により、若手の育成をすすめた。他のCOE拠点や関連研究グループの協力も得ておこなう国際若手ワークショップを毎年開催し、刺激的環境と自由な討論の場を提供した。

拠点企画の成果発信物として、英文の専門書籍6冊、感情科学に関する専門書籍1冊、及び一般向けの学術叢書6冊が出版済み、あるいは印刷中である。学術叢書についてはさらに7冊が予定されている。活動開始からの4年間に、国際誌への論文掲載数や大学院生の国際会議での研究発表数は飛躍的に増加し、拠点全体として大きな発展が確認された。またこれらの成果をまとめた英文の研究報告書に基づいて実施した著名外国人4名と著名日本人2名による外部評価では、最大級の評価を受けた。

なお、本拠点の活動に関する記録は、以下に公開されているので、ご参照いただきたい。
<http://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/psy/COE21/>

文学部百周年記念事業

平成18年に文学部創立100周年を迎えるにあたり、平成16年6月、京都大学文学部百周年記念事業委員会が組織され、その提言にもとづいて「京都大学文学部百周年記念事業会」が結成され、平成17年5月より卒業生・教員等から募金を募るとともに、以下の記念事業を実施する計画が立てられた。それらの記念行事は、下記の通り順調に遂行された。

平成18年6月10日、京都大学時計台記念館百周年記念ホールにおいて記念式典が執り行われ、あわせて次の三氏による記念講演が行われた。

マイケル・ヴィッツェル（ハーヴァード大学教授）「Inside the Texts, Beyond the Texts: Towards New Horizons of Humanistic Studies（文献に分け入り文献を超えて一人文学の新たな地平に向けて）」

ジョシュア・フォーゲル（ヨーク大学教授）「近代日中関係成立秘話―幕末上海派遣使節に関わる新発見史料を中心に」

上田閑照（京都大学名誉教授）「京都大学文学部哲学科―その風景と潮流」

この講演のテキスト全文は『文学部百周年記念事業報告』（平成18年6月刊）に収録されている。なお聴講者は約400名であった。

またこの記念式典にあわせて、6月9日～7月9日の間、京都大学総合博物館との共催で京都大学文学部創立百周年記念展示「百年が集めた千年」が開催され、文学研究科所蔵の貴重典籍・壁画・地図等21点を展示、のべ5千名の観覧者を得た。

記念式典と同日付で、百周年記念事業の一環として『京都大学文学部の百年』（A4版413頁）が刊行された。Ⅰ「文学部百年に寄せて」（卒業生および元教員52名のエッセイ）、Ⅱ「文学部百年の歩み」、Ⅲ「専修のプロフィール」、Ⅳ「附属施設」、Ⅴ「関連団体」、付録資料よりなる。

平成19年3月に記念論集『グローバル化時代の人文学―対話と寛容の知を求めて』（紀平英作編、企画：文学部百周年記念事業委員会、京都大学学術出版会）を刊行した。上下二巻よりなり、上巻は「連鎖する地域と文化」（478頁）、下巻は「共生への問い」（453頁）と題している。執筆者総数35名にのぼる大部の共同研究であり、文学研究科の最新の研究活動の成果として世に問うものであるが、また21世紀COEプログラムの最終報告書を兼ねてもいる。

また募金は最終的に2,700万円を超え、目標額をほぼ達成した。その寄金を基礎に記念事業のその他事業として、①文学研究科・文学部の施設整備、②「文学部・文学研究科教育支援基金」の設置、③文学研究科図書館の貴重資料の修復事業、を行うことで準備を進めている。①については、文学部新館周辺の緑化を進めることを目標としている。②では、経済的に困窮する学生・大学院生に対する授業料補助の制度を設けること、あわせて「人文学教育支援基金」なる制度設立のための準備を進めている。後者は、文学研究科がおこなうシンポジウムあるいは講演会への支援等を目的とするものである。③に関しては、対象とする貴重資料の選定を進めている。

